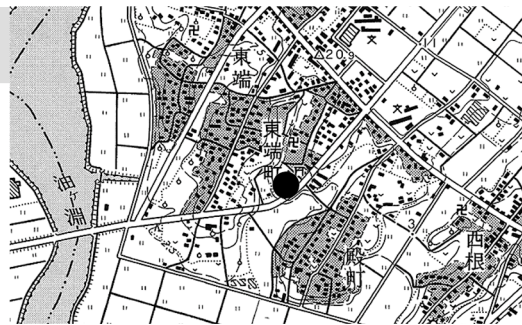


東端城跡

所在地 安城市東端町中繩手地内
調査理由 緊急地方道（安城碧南線）整備事業
 自転車歩行者道設置
調査期間 平成 13 年 10 月～ 11 月
調査面積 800 m²
担当者 竹内 睦・宮腰健司・武井繁樹



調査地点（1/2.5 万「西尾」）

遺跡の環境 東端城は、舌状に延びる碧海台地の南端、標高 6～7 m に場所に立地する。城は文献資料によると 1580 年（天正八年）長田尚勝による築城とされており、規模は約 70 × 70 m、隅丸方形の平面形態をしている。現状では県道に接する南東側以外の三方に土塁が巡るが、築城時には四方向に土塁があった可能性が高く、北西～南西の土塁外側には帯曲輪が取り付く。

調査の経過 今回の調査は自転車歩行者道の設置に伴うもので、県道と接する東端城の南東部分を、城域に沿って 800 m² の面積を調査した。

調査の概要 古代 製塩土器の支脚と土師器甕口縁部片が出土するが、遺構は確認されていない。

戦国時代 遺構は東西の土塁とそれに伴う堀（S D 23）と、その間にある溝・土坑群に分かれる。前者については時期を確定することはできず、後者は 16 世紀中葉があてられた。この両者の関係は、S X 01 と東土塁が重なる部分で、S X 01 → 東土塁の順となり、このことから土塁遺構は築城年代とされた 16 世紀後葉に属すると想定された。

中央の遺構群のうち S D 16 は台地の南端に沿って走り、北東で直角に曲がり SD14 に続く。南西については攪乱によって不明で、北東部分のように明瞭に屈曲する部分は確認できなかった。S D 21 は S D 16 に切られた状態で埋没するが、S D 14 のように一連の遺構を形成していた可能性がある。S X 01 は SD16 の東に広がる不定形な落ち込みで、それに向かって S D 22 が掘削される。また埋没途中に、アサリ・ハマグリ・カキなどの貝廃棄がみられた。

東西土塁は、郭内側が後世の溝の掘削により形状が不明であり、さらに東土塁は外側も削平されている。西土塁の西側では幅約 4 m、深さ約 1.5 m、土塁頂部との比高 4 m の堀（S D 23）が検出された。S D 23 は東側で急に浅くなり、収束して途切れ部分ができるようである。

江戸時代 台地縁にそってカットされた痕跡である S X 05、井戸と思われる S K 32 とそれに向かう溝 S D 15・17 が検出されている。（宮腰健司）



調査区北東部（北西から）



西土塁・堀（S D 23）セクション（南から）

Y -12840

Y -12800

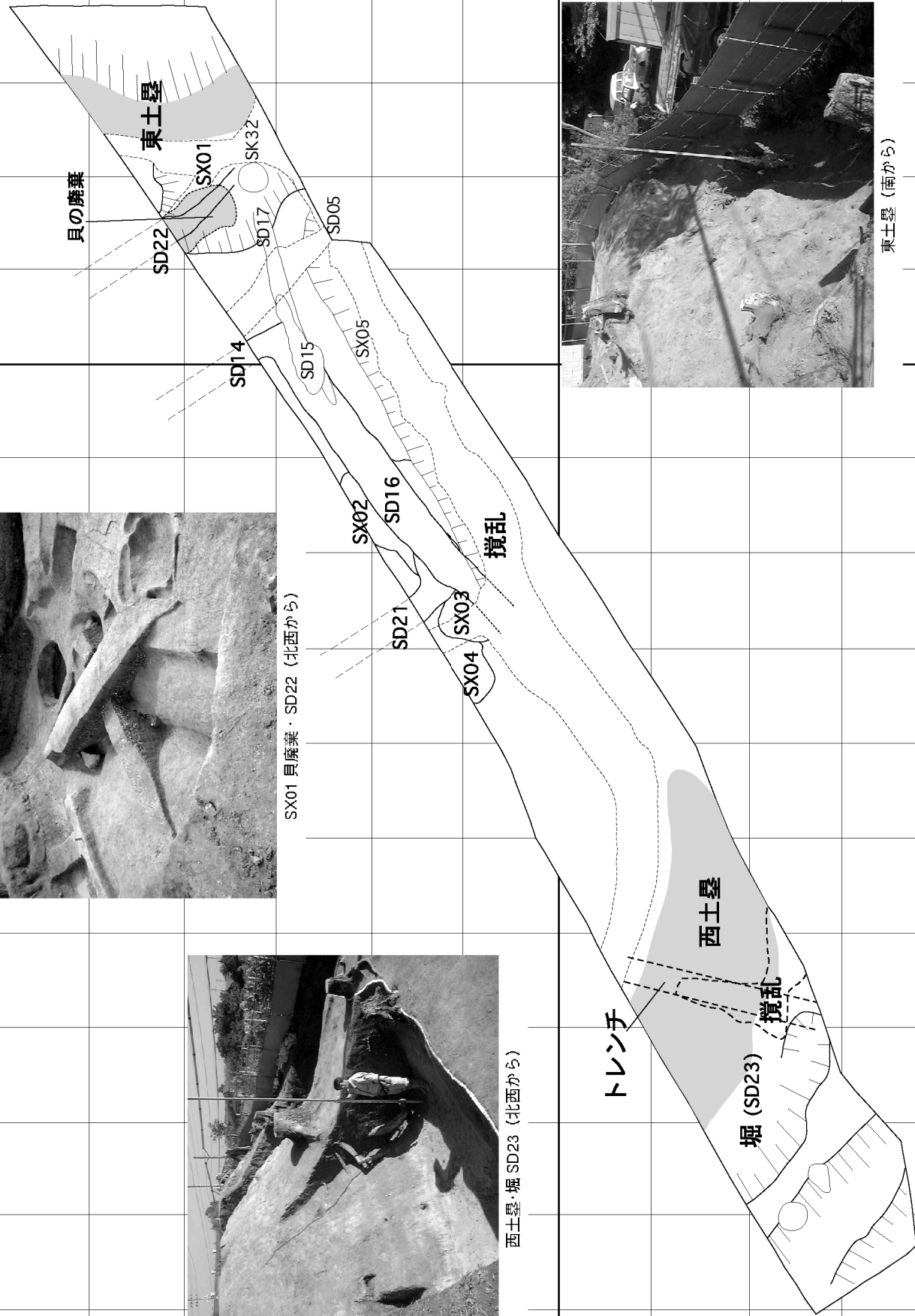
Y -12780



西土壘・堀 SD23 (北西から)



SX01 貝廃棄・SD22 (北西から)



X -122200

X -122220



東土壘 (南から)

主要遺構図 (1 : 300)